

## 第2回 東アジア・中央アジア分科会 議事録

日時： 平成 19 年 11 月 30 日（金） 13:40～15:10

場所： 外務省 153 会議室

出席者： 青木繁夫、沢田正昭、高濱秀、前田耕作、宮治昭、渡辺邦夫（以上、東アジア・中央アジア分科会委員）、浅野敦行（文化庁）、守山弘子（外務省）、清水真一、岡田健（以上、東京文化財研究所）、豊島久乃、田代亜紀子、谷口仁（以上、文化遺産国際協力コンソーシアム）

### 1. 東アジア文化遺産保存学会設立について

沢田正昭（国士舘大学）

**東アジア文化遺産保存学会設立の背景**：保存に対するアジア独特の要望や、保存材料、保存技術があると考え、それらをまず共有することが重要ではないかと考えたのが学会設立の始まりである。例えば、研修を通じた情報や技術の共有が必要とされる。カンボジアのバイヨン寺院における浮き彫りの保存プロジェクトでは、アジア独自もしくはアンコール独自の保存方法を模索していくための実験が3ヵ年計画で開始されたところである。新疆における事業では、ダム建設に際して危機にさらされている壁画保存に協力している。クムトラ千仏洞のプロジェクトもある。エジプトでは、日本の保存技術を利用して地下墳墓の壁画の保存が行われている。また、既に終了したが西安の地下墳墓の壁画保存の共同研究、住友財団助成による中国炳靈寺（へいれいじ）石窟涅槃（ねはん）塑像の修復なども実施してきたが、この塑像修復の際は、日本にある天平時代の塑像保存修復の経験が、中国における塑像保存に繋がった。以上のような経験から、アジア共通の技法などについて共有することが大切だということがわかった。そのなかから、アジア独特の修復科学がでてくるのではないかと思う。このような背景により、今回の学会設立に至った。

**学会の開催**：ソウルにおいて最初の学会が開催された。会議では3カ国語使用とした。学会は会費により成り立つが、中国においては従来の国内保存科学学会は、国家予算によって支出される。ゆえに、中国側は本学会の事務局が故宮におかれるため、その経費は故宮博物院により支出されることになっている。日本、韓国は学会費によって支出する。今後、研究大会を2年に一度、3カ国で開催していく予定である。本学会を東アジアからアジアへ広めていき、最終的にIICやICOMなどへアピールしていければよいと思っている。可能ならば、3カ国の技術者集団を組織して、チームを組んで他国へでかけていくという計画も提案したい。

- ・ 学術的分野で3カ国協力が進んでいるのは非常に喜ばしい。一方で、ICCRROM の会合においては、この学会が韓国によって提案され、実施されたというアピールがあった。東アジアの主

導権はどこでとるのか、という動きもある。中国は世界遺産センターを設立し、有形遺産の分野においてアジア太平洋の地域における主導権をとろうとしている。一方、無形遺産の分野については、韓国がアジア・太平洋地域における主導権をとろうとしている。両国とも、有形・無形遺産どちらの主導権をとろうとしている動きがあるように思う。

→ 技術交流であるので、そのあたりは全く心配していない。韓国のアピールは、韓国が学会に対して出費したことがあるからであろう。当事者たちは技術集団なので、政治的動きはない。

- ・ イタリアは文化外交ということで、中国に対して積極的な協力を実施している。イタリアの修復方法が、アジアでは適応しないことがあるのではないだろうか。その点は、中国と相談して進めているのか、それともイタリアのやり方が採用されているのか。

→ 西安の壁画の剥ぎ取りなどの例があるが、日本が協力を開始する前は、ドイツ、フランス、イタリアによっての協力が行われている。それぞれ様々な方法をとっているが、そのような方法がある、という程度で特に危惧する心配ないと思う。

- ・ 平成 19 年 3 月にイタリアと日本の両文化大臣の間で合意書が結ばれた。合意書では、壁画修復について両国の専門家交流を促進している。また、イタリアが既に第 17 窟の壁画修復を進めているインドのアジャンタ窟においても日本が保存修復を開始する予定である。
- ・ 中国における文化遺産保存については、ポーランドの方法の影響があるのだろうか。

→ 中国における保存科学の分野では、70歳台の大御所が2名いるが、彼らは確かにポーランドで保存科学を勉強している。ポーランドに留学して保存科学を学び帰国した専門家が何名かいるが、現在はそんなにポーランドと関係が深いわけではない。

- ・ このような学会が設立されたことは喜ばしい。学会がニュートラルな活動をする一方で、イタリアと中国、ドイツと中国、というような二国間協力が同時に派生してきている傾向があると思う。それら動きをきちんと捉えておかなければならない。コンソーシアムにきちんと情報を集めてほしい。

## 2. モンゴルにおける発掘について

高濱 秀(金沢大学)

**モンゴルにおける外国の調査団による活動:** 草原考古研究会の調査団は、ウランバートル大学エルデルバートル氏と共同調査を実施している。エルデルバートル氏によるとモンゴルでは現在海外から20チームが調査・研究をしているという。ウランバートル大学は、科学アカデミーと関係が深く、科学アカデミーの歴史研究所もしくは考古学研究所の職員が大学に出向している形である。現在、ウランバートル大学は我々を含めて海外4チームと協力して調査研究を行っている。アメリカ隊はピッツバーグ大学と資料に書いてあるが、インディアナ大学、ペンシルバニア大学などの専門家が参加する非常に大きな調査団である。民族歴史博物館(館長オジル氏)が関係しているのは3チームで、このうちアメリカのスミソニアン機構フィッツヒル氏のチームは、以前北極圏の調査を実施していたが、モンゴルでは、北極圏からモンゴルを考える、またはトナカイ遊牧を考える、ということで調査をしているということである。科学アカデミーの歴史研究所から最近わかれて設立された考古学研究所では、海外15チームと協力をしているという。ロシアのポロシマク氏による発掘調査は5ヶ月ほどノヨン・オール遺跡で行われており、中国関係の遺物などがでていようである。韓国は、中央博物館が中心となり、匈奴、青銅器時代、岩画についての調査を実施している。新潟大学の白石氏はチングス・ハーンに関係があるアウラガ遺跡を発掘している。

**発掘調査概要:** 様々なタイプの遺跡がモンゴルにはあるが、我々が発掘をしている積み石塚は、修復は事実上不可能の遺跡である。発掘調査地は、ウグスウル湖から20キロのオラーン・オーシグであり、地域にはヘレクスル(積石塚)が多く存在する。ヘレクスル群はいろいろあるが、大規模なものは盗掘されている所が多い。しかし、盗掘されたといってもヘレクスルから豪華な副葬品等は出土していない。ヘレクスルは何のために造られたものかということについては長く議論されてきたが、最近では墓であるという説が認められている。モンゴルでは鹿石が500以上発見されているが、人面が彫られているものは10に満たない。オラーン・オーシグの鹿石は人面が彫られている非常に有名なものである。発掘調査では、石堆、馬骨などが出土している。

- ・ モンゴルで調査・研究をしている海外のチームがこんなに多いとは知らなかった。新潟大学の白石先生の発掘しておられる現場は、無償援助でフェンスが作られたそうである。

→ オラーン・オーシグの現場でも、観光客が増えているので、フェンスのようなものを作っている。

- ・ ウコックで発掘をした経験があるが、そこではいろいろ出土していた。内モンゴルでの調査状況はまだ違うと思う。
  - ・ ある時期にモンゴルで博物館を建設する計画があり、その博物館内に保存施設をいれ、研修も行いたいので日本の専門家の協力を、という話があった。
- 地方の中心にはだいたい博物館があるので、そのうちのひとつの話かもしれない。
- ・ 規模が大きい計画だったので、外務省の文化無償か、JICAによる計画だったかもしれない。
- 外務省の文化無償については、後ほどコンソーシアムのデータベースで確認する。
- ・ 内モンゴルの話だが、内モンゴルには博物館、考古研究所がある。そこで、壁画保存修復チームを立ち上げられ、2ヶ月ほど前に博物館の下に位置づけられたということだった。
  - ・ 内モンゴルでも専門家が増えてきているということだろうか。
  - ・ ゼロから立ち上げたということだったが、非常にしっかりした組織であると思う。
  - ・ オラーン・オーシグのような地方の遺跡でも、観光客は多いのか。その遺跡見学を目的として観光客がくるのか。
- 近くに湖があり、この湖が非常に有名な観光地である。遺跡には、その湖のついでに寄って行く。調査中にも、多くの外国人団体観光客がきていた。
- ・ 観光客は、すぐ近くで見学できるようになっているのか。
- すぐ近くに寄れる状態である。遺跡周囲は紐をまわしただけだったので、羊などの群れなどはいってきていた。
- ・ 出土した鹿石は倒れた状態で置いてあるのか、立ててあるのか。また、人面は恣意的な方向をむいているのか。
- 出土した時は上下ふたつに割れていた。上部分は立っていたが、発掘したところ、下部分が横たわっていた。埋め戻しの時には両方立てている。どのような形で保存するかどうかは議論していく必要がある。鹿石は、東を向いていると考えられているが、このオラーン・オーシグの場合は

いい加減であるようである。腰の帯に武器がある。盾が背中にあり、短剣を保持する。そして、東をむいている、というだいたいの傾向があるといわれている。

### 3. シルクロード西安会議報告

前田 耕作（東京文化財研究所 客員研究員）

**会議報告:** 10月30日～31日に西安において「シルクロードの世界遺産登録のための国際シンポジウム」が開催され、東京文化財研究所の地域環境室長山内室長および前田が参加した。本会議は、中国イコモスから日本イコモス会長前野氏に招聘状が送られ、前野氏から前田に出席要請があったため、出席したものである。2007年4月には、ドゥシャンベ（タジキスタン）で開催された会議でロンドン大学考古学研究所ヘンリー・クリア氏によって提出されたコンセプト・ペーパーが採択されている。ここで「シルクロード」は中国と地中海世界を結ぶ現在の15カ国を通る道のネットワークとされ、この定義に繋がる遺跡が世界遺産として申請される予定である。会議は中国および中央アジア5カ国の提案により進められており、中央アジア諸国は、会議にのぞむにしたがって自国のどの遺跡が世界遺産に登録すべき遺跡なのかを考え始めたようである。本会議直前に、中国はイランと文化協力に係る覚書を交わし、シルクロード世界遺産申請への協力を求め、共同でシルクロード研究センターの設立提案、保存修復・人材育成の協力をすすめるということで同意している。

そもそも2002年に提案されたシルクロードを世界遺産登録へという考えについては、ユネスコ親善大使であった平山郁夫先生らが中心になったものだったが、その後の経過に日本が関わることがなかった。しかし、シルクロードの問題であるので、日本が無関係というわけではないと考えていたところ、日本イコモスに会議への招待がきた次第である。日本としても何かしらの役割を果たしたいところだが、会議で提示されているシルクロードの地図には洛陽から東はない。もう少しシルクロードそのものの概念を大きく考えてもらう必要があるのではないかと考え、日本についても考慮していただきたい旨の文章を議長に提出した。

シルクロードとは何であったのか、と見直す機会でもあるので、これを見直した上で、今後の対策を考えていく必要があるのではないかと考える。現在の世界遺産登録は「紀元前2世紀から紀元後2世紀にかけて中国・中央アジア・北西インドを結ぶ絹貿易を結ぶ道である」というシルクロードの概念に基づいて進められている。1910年には「中国からイランを経てシリアにいたる道」という定義が紹介されたが、日本では「中国・中央アジア・西アジア・コンスタンティノポリス・ビザンティンを経て、アジアと地中海世界を草原の道、オアシスの道、海の道で結ぶ交通交易路の全体である」というのが、総括的イメージである。日本は提案のなかに加わっていないが、シルクロードを世界遺産に登録するということは、国境を越え、複数の国による登録という点でも画期的なものである。日本も関心を持つべきである。また、そのシルクロードの再評価で大きな貢献をしてきた日本は、中国と中央アジア5カ国中心として提案に望もうとしているが、より包括的な方向で提案

がされるように協力すべきだと考える。また、シルクロードには中央アジアと中国という2つの大きな中心があるのであって、中国中心として発するものではないと提言されるべきだと思う。

今後の予定としては、2008年9月の西安会議で、シルクロードとその沿線にある諸遺跡についてその登録対象遺跡が決定される。その後、2009年に申請登録、2010年登録を目指している。また、最新のニュースであるが、「新シルクロード建設」のプロジェクトにアジア開発銀行が1兆円を越える融資を行なうことが決まったと報道された。つまり、このシルクロード登録は、文化プロジェクトと経済プロジェクトが2重化されて考えられているものである。

この西安会議に参加して、様々なことがわかり、繋がりができたので、当面はこのネットワークを維持していくべきである。

- ・ 日本のどこかの具体的な遺跡もシルクロードの世界遺産のなかに統括的に含まれるべきなのか。それとも議論の中に日本が関わっていくことが重要なのか？

→ まずは、議論にかかわっていくことが重要だと考える。そして、最終的に総括する時には東アジアを視野にいれていただきたいと思います。

- ・ その場合、韓国についてはどう考えるか。

→ 韓国が積極的に関わる可能性があるのかどうかだと思ふ。

- ・ 11月10日に開催された韓国の中央アジア学会に出席したが、これは設立されて15年の学会である。しかし、西安でこのような会議が開催されているという話は知らない状態であった。

- ・ 「新シルクロード建設」とは何なのか。

→ 鉄道と道路建設の話であるらしい。

- ・ 中国で発見された沈没船の保存について、様々な保存方法が日本にもヨーロッパにもあるわけですが、中国は海中を引き込んで、海底にある状態をつくり展示する博物館を建設しようとしている。韓国もまた沈没船や海洋博物館があり、その線と日本の線を結んで交易世界遺産ができないかという話があったことがある。複数の国が交易で遺産となるというのは、ヨーロッパでは当たり前のように行なわれてきたが、アジアでは実施されていないのでこれからの可能性は多くあると思う。

- ・ 陸のシルクロードというのが提案されると、そこに入らなかったグループが海のシルクロードを

提案する、というように、このシルクロード登録の話もいくつか分かれたグループの動きのひとつという可能性がないか。

→ 世界遺産にむけてある組織的におこなわれている動きが具体的にこなわれているのはこれぐらいではないだろうか。

- ・ 中国国家文物局が主催して、局次長が主導して行なっているため、地域的なものではなく国家的な取り組みとして行われているといえる。
- ・ 日本人としては、シルクロードは奈良までという意識があるが、中国人も含めて世界的にはシルクロードは長安で終了しているという認識が強いのであれば、それを覆すのは大変なのではないか。一般的な認識として、また学術的な考えからシルクロードは日本まで入っていないという考え方をとっているのか。もしくは、中国で長安から広げていくと様々な遺跡が名乗りをあげる可能性があるため、その問題を考えて政策的に長安で終わらせているのかどうか。
- ・ このシルクロード登録については、確かに河南省洛陽も不満をもっているという。

→ ドイツの最初のシルクロード命名者達の考え方は非常に有効である。しかし、現在は、中心の据え方が中国起点であり、少なくともシルクロードの場合は、複数、少なくとも2つの中心が据えられるべきであると思う。例えば、中央アジアと中国の大きな中心があることを認識されれば、ローマや奈良など、東西どちらに広がってもいいように思う。しかし、コンセプト・ペーパーは既に採用されているので、これからは、もっと包括的な表現にってもらうように働きかけ、日本も深い関心をもっているという態度で推進に加わるべきであると思う。またこの段階になるまで、これら動きの情報を得ることができなかつたのも遺憾である。

- ・ 現状からの次の段階として、西のイタリア、東の日本、韓国、南のインド、パキスタン、北のロシアなどを巻き込んで次の形としていけないかと思う。
- ・ 日本イコモスではこのような話はするのだろうか。

→ 今度報告をする予定である。シルクロードで登録されるのは主たるものとしては仏教遺跡である。しかし、仏教についての宗教的関心事はシルクロードでは薄い。もちろんイデオロギーの問題があると思うが、「イデオロギーの限界を越えて」という台詞も会議では聞かれた。

- ・ 日本では法隆寺の壁画や、正倉院を考えた時に、シルクロードを考えるのは自然なことであるため、中国にもシルクロードと仏教について関心を持っていただきたい。

- ・ 中央アジアで文化遺産国際協力を実施する時に、単なる援助ではなく、日本の文化的背景により、その協力を実施していく意味があるのだということを、今後の活動の意義付けのためにも諸外国には認識してもらいたい。

#### 4. モンゴルフォーラム出張報告

青木 繁夫(サイバー大学 教授 / 東京文化財研究所客員研究員)

**出張報告:**9月27日～30日にモンゴルにおいて開催された「日本モンゴル文化フォーラム」に東京文化財研究所研究員二神が出席した。本日は欠席なので、代わりにご報告する。詳細は、配布資料の二神研究員の報告書を参照されたい。具体的遺構の問題などあるが、重要なのはモンゴルが日本の援助に対する期待が大きいということである。今後その点でモンゴルとの交流が活発になるかもしれない。コンソーシアムで今後議題となることもあるのでよろしく願います。何か質問等あったら二神に連絡いただきたい。

- ・ モンゴルは東アジアの重要な国であると思う。2008年1月には無形文化遺産の専門家2名を招聘し、研修を受けてもらうことになった。今後有形分野についてもなんらかの形で協力ができればいいと考えている。

#### 5. その他

- ・ リビング・ヘリテージの研究会開催(2008年1月9日)の案内
- ・ 朝日新聞・上智大学主催シンポジウム「世界遺産と生きる」(2008年1月12日)の案内

以上